

危機において思考することに意味はあるのか？ ——原発事故で引き裂かれた私——

渡部 純*

はじめに

東京電力福島第一原子力発電所事故が、被災者に様々な深い傷を負わせたことはいまでもない。ある自主避難者はその苦しみを端的にこう言い表す。「福島に残る人々、避難した人々、一度避難して戻った人々、選択の数だけ生じる軋轢に、今も人びとは苦しめられています」¹。放射線汚染という危機において「選択の数だけ生じる軋轢」とは、迫られたあらゆる選択の何を選ぼうとも被災者は引き裂かれざるを得なかったということである。

たとえば、南相馬市にある大町病院では、200人近い医療スタッフが17人の看護師を残して次々と避難する事態が起きた。そのときの状況について看護師の藤原百合子は次のように語っている。「もう、みんな泣きながらですよ…去る方も、見届ける方も。たぶん誰にも答えは出せなかったと思うんですよ、あの時。患者さんがいて…でも原発が爆発して自分もどうなるかわからないという中で…患者さんを残していいのか。家族のために避難するのか究極の選択っていうか」²。このような切迫した危機において「究極の選択」が問われたとき、誰も思考の極限を経験する。だが、思考すればその行為は救われたのだろうか。「私は逃げた人間。戻れない人間と自分で思うのはたしかなんです」³。この避難を選択した別の看護師の言葉には、苦悩の末に選んだ行為に対する「負い目」が深く刻まれている。そうであるならば、危機において思考することにどれほどの意味があったというのか。

実は、この問いは筆者の原発事故での被災経験から生じたものでもある。そして、そのときに私が想起したのは、ハンナ・アーレントが著書『精神の生活』において述べた次の言葉であった。

ここぞという瞬間には、それ（思考）がものをいって破滅を防ぐかもしれないのである。すくなくとも自己の破滅だけは⁴。

* 福島県立高校教諭・東京大学大学院総合文化研究科博士課程表象文化論／人間の安全保障プログラム

¹ 原発賠償京都訴訟原告団編、2017、『私たちの決断——あの日を境に…』耕文社、56頁。

² NHK総合「明日へ—支えあおう—南相馬 大町病院 ～原発事故と闘う看護師たち～」2012年5月6日放送。

³ 同前。

⁴ ハンナ・アーレント、1994、『精神の生活（上 第一部 思考）』佐藤和夫訳、岩波書店、224頁。引用文括弧内は筆者による補足。

状況は異にするが、高校教員である私もまた、その当時高い放射線量に汚染された福島市内の勤務校で避難所運営に従事しながら、少なからず自分自身が引き裂かれる経験をした。さまざまな選択や行動に挫折するごとに思考することは、自分の無力さや負い目を痛感させられる経験であった。では、そこにおいて思考は自己の破滅を防いだのであろうか。防いだとすれば、それはいかなる意味においてのことだったのか。

本稿は危機において思考することの意味について、〈私〉という一人称の経験から検討する。おそらく、それは読むに堪えない記述になるだろう。しかし、原発事故において引き裂かれた被災者の「究極の選択」を、一定の理論や概念によって規定的な解釈を与えることは困難であるどころか、場合によっては被災者にとって暴力的でさえある。むしろ、それらの包摂性からはみ出すものとして一人称の経験を記述していくことは、その暴力に抗うためにこそ必要なのではないか。おこがましいことは承知の上で、本稿は筆者自身の原発事故における経験を反省的に記述することによってその問いに応えようと試みるものである。そして、それは同時に原発事故で引き裂かれた〈私〉たちの生がいかにして肯定されるのかという根本的な問いにも結びついたものなのである。

1. 原発事故被災における〈私〉の思考経験

まずは、原発事故発災後の格闘から、それが自分のなかで危機が「終わり」を告げた時点までの私の被災経験について、その思考の経験を記述することから始めたい⁵。

2011年3月11日に発生した東日本大震災による津波の影響により、東京電力福島第一原子力発電所の1号機原子炉建屋が水素爆発を起こしたのは翌12日のことだった。その後、3号機、4号機で次々と同様の事故が起きるなか、放射性プルームが福島市方面に流れ込んできた。そして、私が被ばくの不安を明確に認識したのは、3月15日に福島市内の勤務校で避難所運営が始まったときである。

福島県によれば、同日19時の福島市の空間線量は通常値（毎時約0.04 μ Svとされる）の約600倍にあたる毎時23.9 μ Svを記録している⁶。その状況下で、避難所に運び込まれてきた仮設トイレにプールから水を運び入れることになった。外は土砂降りの雨である。当時の正確な数値はわからなかったものの、ひどい汚染の渦中にあることを認識していた私は、体育館内での業務を割り振られた瞬間、安堵すると同時に雨のなかで作業する同僚たちにうしろめたさを覚えた。そして、その時点から宿泊を伴う避難所運営が約一か月にわたって開始された。避難所となった体育館内は慌ただしくも整然とした運営がなされ、秩序だった集

⁵ 原発事故被災経験については当時のメールなどの記録に加え、2011年9月19日に東京学芸大学連合大学院研究プロジェクトにおいて報告する際に聴取したインタビュー記録に基づき筆者が再構成したものである。

⁶ 福島市の放射線量については福島県放射能測定マップを参照している。

https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec_file/monitoring/m-0/sokuteichi2011.3.15.pdf（確認日：2019年3月29日）

団行動の運営は教員という職業がなせるわざであることにあらためて感心しつつ、一致した協力体制で避難所運営にあたった同僚たちに対しては、今でも深い尊敬の念を抱いている。しかし、そうした中であっても、私自身が引き裂かれる経験があったことは否めない。以下、その点に焦点を絞って記述していく。

被ばくの問題が私にとってだけでなく、他者にとっての危機であることを認識したのは、予定より遅れて実施された3月16日の県立高校入試合格発表のときであった。放射線量が高いさなか、受験生を合格手続きに来校させてもよいのか(同日の福島市の空間線量は毎時14~19 μ Svを記録した)。そのような疑念を抱いていた私だったが、しかし周囲では被ばくに対する警鐘が鳴らされるどころか、誰もそのような不安を抱いている様子もない。もちろん、政府による強制避難指示は出されていない。すると、次第に「放射線に対する不安は自分だけしか感じていないのか」という狂気に陥ったかのような錯覚を覚えつつ見過ごしてしまったのである。

たしかに、五感で感知しえない放射線は直接的な不安をもたらすものではない。それゆえ、それは単なる主観的な思い込みに過ぎず、「科学的に正しく理解すれば不安は消える」という言説がつくられながら、被災者のあいだに分断がもたらされた。私もまた政府が喧伝する「直ちに健康に影響はない」とする公的なメッセージと、避難を促す知人から送られてくる深刻な汚染情報とのあいだで、どうすべきか逡巡しながら業務に従事していた。しかし、あたかも放射線が存在しないかのように進められる避難所運営に対する違和感は増すばかりである。丸一日考え込んだ末に、避難所を閉鎖し避難民とともに職員を解放させてほしいという提案を学校長に直接かけあうことにした。

無論、一度受け入れた避難民を追い出して避難所を閉鎖するわけにはいかない。しかし、そうだからといって、避難所にいるすべての人々が放射線にさらされ続けたまま、この場に留まる状況は異常といわざるをえない。誰も正解がわからない未曾有の危機においては、政府の指示や情報に唯々諾々と従うのではなく、まさに自分自身で考え判断することが求められるのではないか。もしそれをせずに事故の犠牲に供されてしまうのであれば、それこそが耐え難い。それだけではない。自立的な思考や判断の停止が、結果的に他者に対して害を加えてしまった場合、その責任は政府に押しつけるだけでは済まされないだろう。実に、被ばく以上に恐ろしかったのは、考えることを止めたまま被害者としてのみならず、加害者として原発事故に巻き込まれることであった。高線量の放射線汚染のさなかに受験生を合格手続きに来校させるという、取り返しのつかない組織的判断に加担した後で、私が考えたことはこのようなことだった。

18日朝、まず自分の提案に筋が通っているか二人の同僚に相談した後、彼らとともに学校長のもとを訪ねた。学校長との話し合いでは、被ばくの危険性に関する認識の相違はあったものの、同行した女性教員が涙ながらに避難を訴えたことから、彼は被ばくに対する認識を変え、提案に即した新たな避難先を県外に探し出してくれた。もともと、避難所を出るか否かの判断は避難民にゆだねられたため、結果的にそこへ移動する避難民はほとんどいな

かったのだが。

ところで、その間、私は自分の判断でなりふりかまわず避難することもできたはずなのに、その選択をしなかったのはなぜなのか。実際、知人の大学教員は既に自らの判断で県外へ避難していた。それが当然の権利であると考えていた私は、政府から避難命令が出されないまま避難所運営という状況に巻き込まれた自分の運命を呪った。厳密に言えば、事故当初、勤務校の教職員が避難所を運営する法的義務はないとされていた。しかし、次々と押し寄せる避難民を前にそのようなことは言っていられず、いわば救いを求めるものに対する倫理的責任から避難所は運営されていたといえよう（後で追認的に業務命令が出されたが）。着の身着のまま避難してきた人々のなかには、幼児や老人だけでなく重い障害を抱えている人もいた。そのような状況下で自分だけが避難することなど、とてもできるものではなかった。そして、子どもがいない私には、家族を守らなければいけない切迫性もなかった。それが放射線に汚染された居住地に私が残り続けた理由であった。つくづく「直ちに健康に影響はない」とされる低線量被ばくにおける住み続けるか否かの選択が、放射線量についての〈科学的〉な解釈とそれを判断する際の個々人の価値基準のあいだで葛藤を生じさせることの難しさを痛感させられた。

それでも、その他者に対する責任と被ばくの不安とのあいだに折り合いがつかない私は、ただひたすら避難所にいる人々が切迫する危機を認識し、早くそこから退去し始めてくれることを願いながら業務に従事していた。メディアから流れてくる情報は、相変わらず深刻なものばかりである。しかし、一度落ち着いた避難民たちがここから移動することはほとんどなく、避難所の運営は継続していくばかりだ。逆に、日増しにボランティアが集まり出し、不思議な盛り上がりを見せながら避難所は一種の災害ユートピアと化していった。

このような自分の思惑とは逆方向に事態が進むことに焦りを募らせる私だったが、そのさなかにある同僚と避難所内で交わした次の会話が印象に残っている。この状況に不安を覚えるというその同僚に対し、「じゃ、なぜここから逃げないんですか？」と尋ねると、「今ここから離れたら二度と戻ってこられないから離れられないんだよな」と、その彼は答えたのだ。深尾葉子は、危機において「共同体構成員皆で痛みを分けることを倫理的に正しいとする共同体的思考」に支配され、「本来の自らの姿に「蓋」をして、他者から与えられた見方に自己をゆだねる」精神を「魂の植民地化」と呼び、「避難」という選択への圧力になったと指摘している⁷。彼の言葉には、まさに深尾がいう「共同体的思考」がはたらいていたように思われる。だが、そう思うと同時に、彼の言葉が妙に腑に落ちる自分がいることにも気づかされた。つまり、彼の恐れが自分自身のなかにも存在してあるということである。すると、危機における自立的思考の必要性を認識しつつも、その実、私はいったいどこまで自分で思考しようとしていたといえるのだろうか、少なからず私自身が動揺させられたのである。

自問自答とも呼ぶべきこの種の思考経験は、危機を生き延びようとして立てた自分の方

⁷ 深尾洋子、2012、『魂の脱植民地化とは何か（叢書 魂の脱植民地化 1）』青灯社。

針を躓かせる他者の言葉に遭遇するたびに引き起こされた。その頃の私は精神的に追い詰められ、危機意識の希薄な周囲に対して不信感すら募らせていたのだが、そのような私の独善性に揺さぶりをかけられることこそが、まさに危機のさなかにはたらいた思考経験だったのである。そして、そのいとなみは重要な局面において常に私を引き裂くのであった。

それは、避難を主張しつつ残留を選んだ私に差し向けられた批判に対する応答においても生じた。それは当時、避難の必要性和それが叶わない苦しさを綴っていた私のブログ⁸に対する二つのコメントをめぐってのことである。

一つは、同じ被災地に住む知人から寄せられた、「外部からの情報や避難を促す声に耳を傾けるよりも、もっと被災当事者と真剣に向き合えば単純に避難すべきなどと訴えることはできないはずだ」というコメントである。それに対する私の応答は、避難の必要性を述べつつ「出来事の内部には見えない外部の視点こそが重要である」というものであった。もう一つは、この地に留まる決意を表明した私に対し、県外の知人から寄せられた「君は教員であるにもかかわらず妊婦や子どもを逃がす努力もせず、彼女らを『男のやせ我慢』に巻き込むな」というコメントである。これに対して私は、避難することが必ずしもよいケースばかりではないことを述べつつ、「あなたは出来事の中の人ですか？外の人ですか？」と当事者に優位性を与えるコメントで反論している。この二つの応答において私は、一方で出来事外部の優位性を主張しながら、他方では出来事内部に生きる当事者の優位性を主張するという両極に引き裂かれている自分に気づかされる。すると、いったい私自身の立脚点はどこにあったというのか。この二人とのやりとりの後、出来事の内部／外部を区別しつつ矛盾を含んでいる自分を問いただしながら、私は途方に暮れてしまったのである。

しかし、あえていうならば、危機を知りながら汚染地域に留まる選択をした生とは、このような宙吊りにされた自己を生き延びることにほかならなかった。「福島は安全だ」という言説には反発を覚えるが、同時に「福島は危険だ」という言説に対しても心穏やかではいられない。原発事故の被災者は、避難／残留の選択理由を尋ねられたことに対してある答えを示した瞬間、相反する答えを自分の中に見つけずにはいられなくなる。正解のない「究極の選択」に確たる根拠などない。ただ複数の自己が混在するなかで為される決定不可能な決定において、自己解体とともに生きざるを得ないことが放射線被ばくをめぐる被災者の生であり、それをあらわにさせるのが思考といういとなみなのだといえよう。

その思考がより深刻さを私にもたらしたのは、学校再開とともに生じた生徒に対する責任をめぐってのことだった。

3月30日、県教委から予定どおり始業式・入学式を行う決定が伝えられるとともに、学校長から屋外の部活動練習を認めることが告げられた。事故直後よりも空間放射線量は下がっていたとはいえ、その時点でも毎時 $3.2\mu\text{Sv}$ という高い数値が記録されていた。しかし、勤務校内ではいくつかの異論が出されたものの、異常事態のさなかに正常化を進めようと

⁸ 震災当時は公開していたものであるが、2011年3月末に閉鎖した。その内容の記録は筆者の手元に残してある。

する流れに歯止めはきかない。4月8日から学校が再開され、19日には文部科学省から毎時 $3.8\mu\text{Sv}$ （年間で 20mSv ）以下という屋外活動基準が示されると、外での体育授業が実施されることが決定される。周囲では個々に不安を口にする声は聞こえてくるものの、職員の多くが口を噤み、沈黙が全体の場を支配した。「立場上何も言えない」という声も耳にした。途方もない出来事を前にして、誰もが判断に責任がもてないことは十分承知しつつも、誰にも判断の責任を負えないという意味で暗黙に言葉が封じられていたとすれば、それは既に戦争状態であるように感じられた。そして、その状況下で教員が自ら考えて判断することを放棄してしまえば、犠牲になるのは教え子たちである。

組織人としては誤った考え方だったかもしれないが、トップダウン式に進められていく正常化に違和感以上のものを覚えた同僚とともに、学校再開を前に職員協議会の開催を要請した。当初、その提案に対しては、被ばくに対する感じ方考え方に違いがあるなかで協議会を開けば職場が分断されかねないとの懸念も示されたが、最終的にそれは受け入れられた。意見を異にしているからこそ、現場でそれらを共有できければ安心して教育活動に取り組めない。このような思いで臨んだ協議会だったが、被ばく防止のための学校生活ルールや放射線学習講座の提案など通ったものの、全体としてはやはり重い空気のなかで発言は少ないものだった。

とりわけこの時期の私は、放射線に汚染された地で生活していくうえで生徒たちに何ができるのかという気負いで精神が張りつめていた。円形脱毛症や原因不明の背痛におそわれるなど心身ともに緊張の限界でもあった。周囲からすれば、そのような気負いは過剰に見えたかもしれない。当の生徒たちもまた、私が思うよりも被ばくに不安を感じていない様子に見えた。そして、その緊張の糸が切れると同時に、危機が私のなかで「終わり」を告げたのが、6月1日に実施した放射線学習講座においてであった。

この企画を任された私は、放射線に汚染された地で生きていくためには、まず被ばくに関する知識をもったうえで、自分で生活上の判断ができるようにならなければいけないという考え方のもとで計画に取り組んだ。だが、結論からいえば、講座内容の難解さから「現時点では直ちに健康に影響はない」という部分だけが印象づけられて終わり、その日を境に校内には「放射線のこととは終わったことだ」という認識が広まった。いいかげんに被ばくの不安から解放されたいという生徒や教員たちの切なる思いもはたらいたのだろう。それをきっかけに、それまで守られていた放射線を防ぐ学校生活上のルールも崩壊した。この瞬間、自分の意図が裏目に出た敗北感と、私自身の被ばくへの不安を彼らに投影していたに過ぎなかったのかもしれないという挫折感に襲われながら、原発事故という危機との格闘は私のなかで「終わり」を告げた。そして、そこにはもはや思考の余力は残されていなかったのである。

2. 危機における思考の意味—アーレントの「思考」を手がかりに

私の被災経験を振り返るならば、思考は絶えず自己を引き裂き、危機を生き抜こうとする指針や行為を骨抜きにして、むなしさと苦しきをもたらすばかりであった。思考したからといっていい知恵が生まれたり、事がうまく運んだりしたためしなどほとんどない。連戦連敗。それでも私が「思考」にこだわるのは、「はじめに」でふれたアーレントの言葉に微かな望みをかけていたからである。以下、アーレントの「思考」をめぐる考察を手がかりに、あらためて〈私〉の経験を問い直す。

アーレントは危機における「思考」について徹底して考え抜いた哲学者である。いわゆるアイヒマン裁判から発見された「悪の陳腐さ」を問いの端緒とするその思想は、晩年に執筆された『精神の生活』にまとめられている。〈考えないこと〉と悪との間には何か関係がありそうだ、という彼女の問いはすぐれて倫理的である。ただし、それは「思考」が普遍的な倫理命題を提示するというものではない。アーレントにおいて思考は「認識」とは区別され、「意味」を問い直すいとなみである⁹。そして、その効果は「二重の意味で麻痺症状」を引き起こす。一つは他のすべての活動を中断して「本質的に立ち止まって考えること」であり、そしてもう一つは、それまで疑う余地がなかったことに確信を持たなくさせ、「人を呆然とさせるような後遺症をもたらすこと」である¹⁰。その点で、思考は公認されている規範や常識的な価値を否定するニヒリズムを本質的に備えており、あらゆる信条に対して危険なものなのである。しかし、そうであるがゆえに常識が壊れた危機において思考は重要な倫理的意味をもつ。

以上の意味で言えば、原発事故という未曾有の危機下において被災者はこの種の思考を経験せざるを得なかった。もしかすると、そこで生じた沈黙とは、思考によって呆然とさせられた被災者の身ぶりだったのかもしれない。問題は、思考がもたらす寄る辺のなさに精神が耐えがたくなる時である。その場合、人は役に立たないと知りつつ従来 of 行動規範にすがるか、その現実そのものを直視することから逃避することになる。

また、アーレントは思考に身を捧げた人間の原則をソクラテスの二つの発言を引き合いに以下のように論じている。

悪事をするよりは、される方がましだ¹¹。

⁹ アーレント前掲書、第1部第1章第8節「科学と常識、カントによる知性と理性の区別、真理と意味」参照。アーレントは真理を求める科学的認識と意味を求める思考を区別している。その際、アーレントはカントの「知性 (Verstand)」と「理性 (Vernunft)」の区別に依拠しつつ、次のように述べる。「知性 (Verstand) は感覚に与えられるものをとらえようとするが、理性 (Vernunft) の方は意味を理解しようとするのである」(68頁)。

¹⁰ 同前、203-205頁。

¹¹ 同前、209頁。

私のリュウ琴や私の指揮する合唱隊が、調子が合わないで不協和な音を出すとか、また、世の大多数の人たちが私に同意しないで反対するとしても、そのほうが、一人であるから、私が私自身と不調和であつたり、自分に矛盾したことを言うよりもまだましなのだ¹²。

通常、「安っぽい道徳」に見える第一の発言だが、近代語訳ではたいてい無視されている「一人である」という第二の発言のキーワードに注目することで、その倫理的な命題の起源が思考にあるかもしれないことをアーレントは論じる¹³。すなわち、その倫理性とは〈一者の中の二者〉のあいだで交わされる思考＝自己内対話において、自分自身と不調和をきたしたり矛盾したりすることを避けようとして為される問答なのであり、その基準は「真理」ではなく、「二者」という差異性において「自分で首尾一貫」している「同意」に求められる¹⁴。そして、その過程において「悪」を回避する可能性を見出すのがアーレントの眼目なのである。

上述したように、思考は真理を明示するいとなみではないとアーレントはいう。そして、正解の見いだせない危機においても、ひたすら自分自身と問答を交わしながら、不調和をきたさないように対話し続ける過程が思考であるというのである。またアーレントはそこで「自分自身とかみ合わない」のは、「いやしい人」の特徴であり、連れを避けようとするのは邪悪な人の特徴¹⁵なのであるともいう。こうしたアーレントが思考に見出す倫理的意味は、「道徳法則」や「神の声」など普遍的な道徳義務が精神に命じるという仕方とは異なり、あくまで自分自身との関係における調和に求められる。複雑な被災者の選択の是非を規定的な義務概念でもって説明することの困難や暴力性については既にふれたが、むしろ個々の被災経験を一般性に回収させないためには、こうした自分自身との調和という観点からその倫理的意味を探ることが重要ではないだろうか。

では、あらためてこの観点から原発事故の危機下での私の思考経験の意味を問うてみよう。アーレントは自分の魂がそれ自身と調和せずと争っているときの例として、シェイクスピアにおける『リチャード三世』を引き合いに出している¹⁶。そこでは自分自身と罵り合う殺人者リチャード三世のさまが描かれているが、最終的にこの殺人者は、孤独になったときに待ち構えているもう一人の自分という「連れ」を恐れ、対話の相手にすることから逃走する。「うまく生きようとする人」はその「連れ」なしで生きようとするのであるが、それが「邪悪な人」の特徴なのである。

(我々が自分の発言や行動を吟味する) 無言の会話を知らない人は、自分自身と矛

¹² 同前、209-210 頁。この言葉自体はアーレントによるプラトン『ゴルギアス』、474b、483a・b (邦訳書 84・113 頁) からの引用である。

¹³ 同前、210-212 頁。

¹⁴ 同前、212-216 頁。

¹⁵ 同前、219 頁。

¹⁶ 同前、219-220 頁。

盾しても平気なのであり、自分の発言や行動を説明することができないし、そうするつもりもない、ということになる。犯罪を犯したとしてもすぐに忘れられるだろうと決め込んで平気だ、ということにもなる。悪人は「後悔の念」でいっぱいになるということはない¹⁷。

原発事故下で私を引き裂いた思考経験とは、アーレントのいうところの、少なくとも自己矛盾しても平気な「邪悪な人」に陥ることを避けようとしていたのだろう。たしかに、首尾一貫しなかったという点で、私は「いやしい人」であったかもしれない。しかし、その「いやしさ」を直視できなければ、「邪悪」に陥ることをアーレントが引いたリチャード三世の例は示している。アーレントによれば、そもそも思考経験の副産物である良心は「人を障害だらけにする」のであり、思考は自己分裂をもたらすことを本質としているということになる¹⁸。しかし、たとえ障害だらけにさせようとも、考えない人生は無意味であるだけではなく、十分に生きているとはいえないとさえいうのである。なぜか。その理由を彼女は、自分自身を仲間にできないという意味で自己を喪失しているからだという。つまり、「悪人」とは、自分自身と対話することを知らないという意味で「自分自身を失っている」¹⁹人のことなのである。

アーレントが主張するほとんど唯一の倫理的命題は、「もし思考したいのであれば対話を行う二人がいい関係であって、パートナー同士が友人であるように配慮せよ」²⁰というものであり、「〈一者の中の二者〉が友人となって調和よく生きていく道を塞がないようにすること」²¹である。それを敷衍して考えれば以下のようなになる。自分自身の行動と発言について考えるときがきても、多数派によって同意されたことではなく、「私自身と仲良くやっていけるかどうか」が思考することの基準であり意味である、と。そうだとすれば、原発事故の危機の中で私が思考し続けていた意味も少しは明らかになってくる。どれほど自分が引き裂かれようとも、自己矛盾したまま自分とのつきあいをやめるわけにはいかなかったということである。

ところで、このアーレントのいう〈一者の中の二者〉におけるもう一人の自己とはいかなる存在なのか。この点を考える上で興味深いのは、原発事故後に急速に広まった「脱原発」のスローガンに対して、それを即座に受け入れられないとためらう被災者の言葉である。原発立地の学校に長年勤務して被災したある教員は、それまで原発を積極的に肯定してきたわけではないが、その存在に疑問をもたないままその地域の教育に携わってきたものとして、原発事故に被災したからといって脱原発を主張し始めることには躊躇を覚える、と私に

¹⁷ 同前、222頁。

¹⁸ 同前、222頁。

¹⁹ 同前、215頁。アーレントはこの言葉をヤスパースがよく用いた“*ich bleibe mir aus*”という表現から引用し、表現を変えれば「私が一であって仲間がいない状態」であるとしている。

²⁰ 同前、217-218頁。

²¹ 同前、222頁。

語ってくれたことがある。そのことを、彼は「(脱原発を主張する自分は) なんか違うんだよね」という言葉で言い表している。これは過去の自分との折り合いのつかなさ、即座に未来志向的な「新しい価値」へ転換することに対するためらいとなっているのだが、それは〈考えないこと〉によってではなく、むしろ被災前後という時間的な差異が生み出す自己との首尾一貫性を問うなかで生じたものである。すなわち、〈一者の中の二者〉におけるもう一人の自己とは、過去と未来が衝突するなかで出来る時間的な存在である。そして、その時間的な狭間で生じる「動かぬ現在」、すなわち「ヌンク・スタンス *nunc stans*」という無時間の溝こそが思考の場なのである²²。この「思考の場」についてアーレントは以下のように述べている。

思考する自我が時間のなかでいる場所があるとすれば、過去と未来の狭間、現在というこの神秘的でとらえどころのない今であり、時間における単なる溝ということになる。それにもかかわらず、もっと確固とした時制である過去と未来が、もはや存在していないもの、まだ存在していないものを示すかぎりにおいて、このとらえどころのない今にむかって行くのである。過去や未来がそもそもあるのは明らかに人間のおかげであり、人間こそが両者の間に入りこんでそこに現在を作ったのである²³。

しばしばアーレントが例として引き合いに出すように、ナチス時代に「汝殺すなかれ」という根本的戒律が「汝殺すべし」に一晚で転倒したことや、ナチス崩壊後の「再教育」によってドイツ人が「新しい価値」へ容易に転換したことは〈考えないこと〉によって成し遂げられた²⁴。言うまでもなく、敗戦によって軍国主義から民主主義に一変した日本人もしかりである。では、同様の事態が原発事故後の日本社会に起きなかつたらうか。政治のはなしではない。新しい価値への大転換が社会的に行われようとするのと、それが個々人の精神において生じることとは別次元のことであり、しばしばそのスピードは齟齬をきたす。それは、前者が過去から未来へという直線的な時間を突き進むのに対し、後者は過去と未来とが私という現在に向かって衝突するたびごとに不意に思考の場が開かれ、それが生きる限り無限に引き起こされるものだからである。

付言するならば、この過去と未来の起源は自分の経験を超えている。なぜ、あの危機のさなかに私は恐れを抱いたのか。それは過去においてチェルノブイリをはじめとする原発災

²² 同前、238 頁。

²³ 同前、240 頁。

²⁴ 同前、205-206 頁。この点につき訳者である佐藤和夫は次のように注釈をつけている。「『〈考える〉ことなしにあっさり過去を整理してすましてしまい、まるで悪かったのは一部の悪人たちだけであるという非難がくり返される。アイヒマン裁判をめぐる論争はこれ抜きには論じえない。ユダヤ人もドイツ人もナチズム登場に深く考えることなく、黙認していったということこそ重要だとアーレントは主張する。〔中略〕立ち止まって考えることの欠如こそが巨悪の原因なのだというアーレントの批判はここにある」(同書、287 頁)。

害や水俣事件に代表される公害問題、広島・長崎の原爆投下、戦時下の翼賛体制など過去の悲劇の想起が、一気に私に押し寄せたからである。また、私は職員協議会の意見書に「10年後20年後の教師として責任を考えます」というメモを書き記しているが、そこにはまだ見ぬ教え子の将来や生徒、子どもといった無限の未来からの問いかけや責めを予期した恐れが看取される。思考とは、この二つの力に押し出されながら現実から離脱せずに格闘する過程そのものなのである。

本稿の問いの原点に戻ろう。原発事故という危機において私を引き裂いた思考は、「自己の破滅」を防いだのだろうか。少なくとも次のようにはいえるのではないか。

原発事故のさなかに生じた私の葛藤について、前節では、「複数の自己が混在するなかで為される決定不可能な決定において、自己解体とともに生きざるを得ない被災者の生」と表現した。そもそもアーレントの文脈にしたがえば、それまで公的に通用していた価値や規範を吟味し解体するのが思考の本性であった。私の原発事故におけるにおける思考経験とは、被ばくをめぐって「大多数の人びと」に反対されようとも、自分自身で考え抜くことを指針とするなかでいとなまれたものだった。しかし同時に、思考はその自らが立てた指針を解体させもした。とりわけ後者においては、危機に立ち向かうために自分自身で考え抜いた指針と、その意欲をたちどころに骨抜きにした。何かを打ち立てたかと思えばすぐに更地にするという意味では、思考は何も成果を残さない。だが、それは危機にあっても自己矛盾を問い直す自分とのつきあいをやめなかったという点では、自己を破滅させなかったものといえるだろう。

もちろん、そこにおいて自分自身が首尾一貫していたわけではないことは、既にみたとおりである。けれど、私の思考は必ずしもそのことを断罪するようなかたちの問答ではなかった。むしろ、原発事故から8年も経つ今もなお、こうしてあのときの自分を問い続けているのは、果たしてほんとうに自己矛盾していたのかどうかを点検し続けているということでもある。少なくとも、「問いかけてくる自己との関係を切り捨てない」という点において、私の思考は首尾一貫しようとしていた。そして、この限りにおいて思考は危機において格闘していた過去の自分も破滅させないでおけたのである。

さらに、そのことは次のようにもいい得るだろう。前節の最後において、原発事故の危機が私のなかで「終わり」を告げた日について述べた。比喩的にいえば、それは原発事故で格闘していた私の精神が「死んだ」日であった。もちろん、いまだに原子力緊急事態宣言は継続中であり、途方もない廃炉作業の収束が見えない以上、原発事故そのものが「終わった」わけではない。「あの日」以降の私もまた、別なかたちで闘いは続いている。そうであるにもかかわらず、私のなかでは「死んだ」という自覚が生じたことは否定できなかった。しかし、こうしてその「死」の意味を今もなお問い直そうとするたびに、「あのときの私」を切り捨てられない自分がいることに気づかされる。いわば、危機の「死」後を生きるためには後からの思考が必要なのである。そして、それが可能になるためには、危機のさなかに格闘した思考の痕跡が残されていなければならない。その意味で言えば、原発事故によって多く

の被災者が負わされた「負い目」とは、必ずしも払しょくされるべきものではないのかもしれない。むしろ、それは「あのときの自己」を破滅させないための徴でさえあるのではないだろうか。

3. 思考と他者

第2節において、〈一者の中の二者〉のあいだで交わされる思考の原則が、友人としてのもう一人の自己との内的対話において首尾一貫している点にあることを確認してきた。原発事故において多数派と意見を異にしても、自分で考えて指針を立てようと格闘したことの意味は「もう一人の自己」との関係を断ち切らないためであった。しかし一方で私は、危機において「複数の自己」の存在を確認していた。すると、そこにおける思考の二者性と複数性はいかなる関係にあるのだろうか。言いかえれば、それは〈一者の中の二者〉における「もう一人の自己」とは「誰」なのか、という問いでもある。

前節でふれたソクラテスの第二の発言に立ち戻ってみれば、その「自分自身」とは他者から区別された「純粋な一つの自己」であるかのように読み取れる。しかし、前節で記述したように、他者の言葉は自分を引き裂く思考を引き起こす大きな契機であった。もちろん、放射線をめぐる多様な言説や主張が飛び交うなかであって、すべての他者の言葉が思考を引き起こしたわけではない。自分とは異なる見解であろうとも、それが自分のなかにも否定しがたく存在するような、いわば自己のなかに潜む他者性ともいうべき要素を看取した場合に、それらは私の思考を引き起こすのである。言いかえれば、自己を引き裂くその他者性を自己から排除してしまえば、自分の中の首尾一貫性が失われるようなものである。では、この自己のなかの他者性は思考にどのような意味をもつのだろうか。

自分の人生の範囲を超えて過去について思いをめぐらせて判断し、未来について思いをめぐらせて意志的に計画を開始するならば、必ず、思考活動が政治的にどうでもよい周辺的な活動ではなくなるということである。そしてそのような反省的思考は政治的緊急事態において必ず生じるのである²⁵。

この場合の「政治的」とは他者と協同する活動を指すが、アーレントは思考の「破壊」がそこにおける判断力を解放する効果があるという。つまり、自己への配慮というソクラテス的思考から、他者ととも世界への配慮にかかわる判断力へ通じる回路がここに開かれる。これについてアーレントは、自分自身と首尾一貫する原理とするソクラテス的思考とは区別された思考様式をカントの『判断力批判』に見出し、以下のように述べる。

その思考様式は、たんに自己と一致しているだけでは十分ではない。むしろそれは、

²⁵ 同前、223頁。

「他のあらゆる人の立場で思考し」うることを要件とするものであり、それゆえ、カントはこの思考様式を「視野の広い思考様式 (eine erweiterte Denkungsart)」と呼んだ。判断力は、他者との潜在的な合意にかかっており、何かを判断する際にはたらく思考過程は、純粹な推論の思考過程とは違って、私と私自身の間の対話を意味しない。判断力は、心を決めるにあたっては完全に私一人であるとしても、私が最終的に何らかの合意に到達しなければならないとわきまえている、そのような他者との先取りされたコミュニケーションのうちに、つねにまずもって自らの進むべき途を見出す。この潜在的な合意から判断力はその特有の妥当性を引き出す。これは他方で、判断力は「主観的で私的な条件」から解放されていなければならないことを意味する²⁶。

アーレントは、私自身との同意を原則とする自己内対話としての思考様式と他者との潜在的な合意を原則とする思考様式とを区別しながら、後者において主観的で私的な思考から普遍性を志向する公共的な判断への途上を開いていく。では、この両者における同意ないし合意は一致しうるだろうか。常識や日常的な規範が崩壊した危機においてそれは困難であろう。そうであるにもかかわらず、原発事故において意見を異にした他者の言葉に引き裂かれ、宙吊りにされた私は、なぜ彼らの言葉をいまだに考え続けるのか。それは、そのときには自覚していたわけではないが、彼らの論理に自分自身の首尾一貫性を構成する要素が潜在していることを直感していたからではないか。そうだとすれば、二つの思考様式の区別において自己／他者が設定されるというよりも、既に〈一者の中の二者〉に他者性は混在しているとみるべきではなかろうか。いうまでもなく、本稿ではこの思考様式を判断力への可能性としてではなく、あくまで思考の圏域において考えているわけだが、このように考えるのは次の理由からである。

私は原発事故から時間が経つにつれ、さまざまな被災者の声の聞き取りや、あるいはその経験について語りあう場を設定したり、訪問したりする取り組みを続けている。なぜ、私は他者の言葉を聴きとろうとするのか。その理由を端的に言えば、あのときの自分には見えなかった論理、あるいは、もしかしたら「あのようであったかもしれない別の自分」の姿を見つけ出すためなのではないかと考えている。他でもありえた自己の可能性を追求することで、あのときに引き裂かれた自分とは何だったのかを理解したいのである。それは自己理解のために他者を手段化することではない。ましてや研究対象として相手を客観化するためにする聞き取りや対話ではない。その場に自己をゆだね、相手に共鳴しつつ同化するのではない仕方において立ち現れる他者の言葉をつむぎだすことを目的とした活動なのである。本稿ではその詳細について触れられないが、一つだけ印象的な場面を紹介しておきたい。

それは、2016年に福島市において阿部周一監督のドキュメンタリー映画『たゆたいなが

²⁶ ハンナ・アーレント、1994、「文化の危機——その社会的・政治的意義」『過去と未来の間——政治思想への8試論』引田隆也・齋藤純一訳、みすず書房、297-298頁。

ら』(2015年作品)の上映会を開催したときのことであった²⁷。同作品は、福島市出身の阿部が自ら経験した原発事故自主避難を起点とし、「福島」からの自主避難者と「福島」に残る選択をしたものたちが抱く葛藤を描いたものである。上映後、阿部監督と参加者同士による対話の場面を設け、映画の感想や考えたことが落ち着いた雰囲気の中で語られていった。参加者のほとんどが原発事故被災当事者たちであったが、なかなか核心に迫るような発言が出ない流れのなか、ある若い参加者の問いかけがその流れを一変させる。原発事故直後に福島市で暮らしていたその参加者は、被ばくの恐れがあったにもかかわらず、母親が避難についていっさい話さなかったことについて、「あのとき母は何を考えていたのだろうか」と割り切れぬ思いをその場に投げかけたのだ。家族間におけるこの種の葛藤は、参加者の多くが経験した問題であった。すると、この発言を受けて別の女性参加者が次のように語りだした。

私もそのとき小六の子どもの親で [中略]、でも私は [高校] 三年生の担任でもあり、もうこの運命を受け入れようと思いました。逃げないと決めました。逃げられない子が同じようにいるだろうから、そういう人たちに寄り添って生きるという道を選択して。そういう選択をしちゃった親の子どもでゴメンで感じて、私は息子に避難ということは一言も言ってません。先ほどいって下さった方のお母様もものすごい葛藤があったと思います。私もドキュメンタリーを観たとき、しゃべったら泣いちゃいそうと思っていかなかったんですけど、なんか子どもにごめんて思っ…やっぱりまだ揺さぶられる自分があるんだなって思いました。でも子どもの方が強くて [中略]。…ごめんなさい…こんなに映画を観て揺さぶられると思わなくて…。

つくづく人が語り出すというのは不思議な現象である。まるで彼女の語りは、「しゃべるつもりはなかった」という彼女の意志とは独立して存在しているかのようだった。なにより、彼女の発言は他者のうちに自己を見るかのような経験を私にもたらした。「逃げられない子が同じようにいるだろうから、そういう人たちに寄り添って生きる」という選択理由は、避難を主張しつつ残留を選んだ私自身のなかに見当たらずとも腑に落ちる言葉であった。だからといって、彼女にとってそれが正しい選択であったとはいえないことは、事故から5年を経てもなお自分の子どもに対する負い目が残っていることから確認できる。逆に、子どものいない私にとって、それは本質的には理解できない側面でもある。しかし、思考という自分自身との対話とは、そのように「あり得たかもしれない」自分を含めて自己の首尾一貫性を問い続けるいとなみなのではないだろうか。つまり、他者の言葉のなかに、自分にも潜在

²⁷ 同上映会は、「3.11」後の「福島」を考える目的で発足した活動団体「エチカ福島」の主催のもと、2016年10月29日に開催された。渡部は同団体の共同代表の一人である。その詳細については以下のブログ (URL:<http://kitsuncinu.jugem.jp/>) を参照。

的にあり得たかもしれない他なる自己を発見することは、〈一者の中の二者〉における「もう一人の私」の幅を広げることに通じている。そして、その幅とは過去と未来の他者の衝突によって生じる「動かぬ現在」の時間的な厚みをもたらすものなのである。これは世界の配慮へ通じる判断力とは区別された、自己への配慮としての思考にとって他者が果たす意味なのではないだろうか。

4. 結びにかえて

本稿は、原発事故で引き裂かれた私の被災記録を「思考」をめぐるアーレントの思想との対話を通じて反省的に解釈したものである。冒頭で述べたように、葛藤にまみれた私的な被災記録は読み手にとって読むに堪えないものであったかもしれない。もし、そのなかで誰かを責めるような記述になっていたとすれば、それは私の独善性が招いた不手際である。また、本稿で対話の相手としたアーレントの思想についても牽強付会な解釈に陥っていることは否めない。これらのずさんさを承知でなお、原発事故における私の経験を記述しようとしたのは、やはり次のアーレントの言葉に導かれてのことである。

理解することは、正しい情報や科学的知識をもつこととは違い、曖昧さのない成果をけって生み出すことのない複雑な過程である。それは、それによって、絶え間ない変化や変動のなかで私たちがリアリティと折り合い、それと和解しようとする、すなわち世界のなかで安らおうとする終わりのない活動なのである²⁸。

アーレントによれば理解することは終わりをもたず、最終的な結果をもたらすことはできない。しかし、そうであるがゆえに「生きることのすぐれて人間的なあり方」²⁹なのだという。というのも、私たちの行為によって生じたりそれによってこうむったりする出来事と和解しようとするならば、そこに生きる過程そのものの意味を生み出さずにはいないのだが、それを可能にするのが「理解すること」だからである。原発事故から8年を経た今、過酷な出来事の記憶を「復興」というスローガンにおいて掻き消そうという欲望の力は、被災地内外に加速度的にはたらいっている。加害の側のみならず被害を受けた側においても、いまさら精神の傷を蒸し返したくはないという思いが無意識に作用することは、けだし当然であろう。しかし、そのような空気に覆われつつも、当時の被災した自分とは何だったのかと、出来事との折り合いがつかないまま問い続ける人々がいることもまた事実である。そのような人々にとって思考し続けるということは、出来事のリアリティと折り合おうとする和解を志向した意味を問い続けるいとなみなのである。

²⁸ アーレント、2002、『アーレント政治思想集成2：理解と政治』齋藤純一ほか訳、みすず書房、122頁。

²⁹ 同前、123頁。

その方法として、本稿は当時の〈私〉の経験の記録に基づきながら回想的に思考経験の軌跡をたどることとした。これについて、現時点から過去を回想することはいかなる意味においても「ありのままの思考経験」ではない。後知恵として後から都合のよい解釈を刷り込ませている可能性も否定できないだろう。言いかえれば、常に後からの思考は改ざんの可能性を孕むことを否定できないのである。これに対して、西村ユミの「対話」に関する次の考え方が参考になる。

語られた経験は過去のその時の経験そのものではなく、「今」を起点にパースペクティブ的にまなざしが向けられ、「今」において捉えなおされた過去なのである。したがって、対話によって語られた経験は、「今」まさに生み続けられている開かれた経験であり、こうした経験の語りには厚みを帯びた時間を垣間見ることができる。逆に言えば、それだからこそ、同じ出来事を語っても相反する経験として表現されたり、戸惑いや躊躇から自由になれないのである³⁰。

西村は「思考」ではなく「対話」について論じているのであるが、「自己内対話」という思考様式に照らし合わせて考えてみても非常に示唆的である。つまり、私のかつての思考経験について反省的に思考することは、「今」まさに生み続けられている開かれた思考経験なのであり、そこには既に確認した厚みのある時間性を帯びている。すなわち、危機における思考とは、このような時間的な厚みをもたらしながら、危機という時間の内外で精神が生き延びることを可能にするいとなみなのである。

(わたなべじゅん・福島県立高校教諭／東京大学)

³⁰ 西村ユミ、2018、『語りかける身体：看護ケアの現象学』講談社、213-214頁。